おくのほそ道の終着地・岐阜を想う～夏草「おくのほそ道」から～　④「大垣」

※露通・越人・如行・前川子・荊口父子　芭蕉の弟子
※この港　敦賀（福井県）の港
※美濃国　今の岐阜県

露通もこの港まで出でむかひて、美濃国へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より来たり合ひ、越人も馬をとばせて、如行が家に入り集まる。前川子・荊口父子、その外したしき人々、日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、かつ悦びかついたはる。旅のものうさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮をがまんと、また舟にのりて、

※いまだやまざるに　まだ治らないうちに
※伊勢の遷宮　伊勢神宮は二〇年ごとに建物を新しくし、ご神体を移す。
※長月　旧暦九月

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

露通もこの港まで迎えに出てきており、美濃へと一緒に行く。馬に助けられて大垣の庄に入ると、曾良も伊勢から来ており、越人も馬を飛ばせて如行の家に集合した。前川子や荊口の親子、そのほかの親しい人たちも日夜訪れてきて、まるで生き返った人に会うかのように喜んだりいたわったりしてくれる。旅の疲れもまだとれないうちに九月六日になったので、伊勢神宮にお参りにいこうとまた船に乗って出かける。

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ（はまぐりのフタと身が別れていくように、親しい人たちと別れて二見が浦に向かう。秋も過ぎようとしているのだな）